

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 3 日現在

機関番号：12608

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23520372

研究課題名(和文)ハプスブルク帝国下の文学・芸術における東方への眼差し

研究課題名(英文)Glance toward the Orient in the literature and arts under Habsburg Empire

研究代表者

山崎 太郎 (Yamazaki, Taro)

東京工業大学・学内共同利用施設等・教授

研究者番号：40239942

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：東西文明の接点で多民族国家でもあったハプスブルク帝国の地政学的位置どりに着目した当共同研究は、歴史学的・実証的古文献調査(山崎)、広大な分野の文献渉猟とフィールドワーク(市川)、言語の問題を掘り下げた分析(安徳)という研究アプローチの違いともども、「歌劇と18世紀の対トルコ・北アフリカ(山崎)」「カフカ、リルケの散文作品における正教ロシア、ユダヤ、アジアの影響(市川)」「ホフマンスタールと古代ギリシャ(安徳)」という対象領域の広がりによって、オリエントというテーマが含み持つ地域・時代・ジャンルの多様性を浮き彫りにし、にもかかわらず全ての核心にある「他者性」の問題を再確認するに至った。

研究成果の概要(英文)：This co-research project started by paying attention on the unique geo-political location of the Austrian Habsburg Empire, a multiracial nation where Western and Eastern civilizations meet, succeeded in demonstrating the diversity and expansivity of the theme “orientalism”, with variety of objects, geographical areas and ages(Yamazaki: Mozart’s opera, Turkey and North Africa in the 18th Century, Ichikawa:Kafka and Rilke, Eastern Orthodox Christianity, Russia, Judaism, Hofmannstahl, ancient Greece,) and of researching approaches (Yamazaki:historical studies, investigation of old documents, Ichikawa:landscape-fieldwork and literal research on the vast academic disciplines, Antoku:analytical studies with a specific interest in the issue “philosophy of language”), and rediscovered the problem of “otherness” that lies beyond all the diversity and expansivity in the core of our theme.

研究分野：オペラ

キーワード：ヨーロッパ文化

1. 研究開始当初の背景

科研費の申請に踏み切る前の過去数年間、**山崎**は本来の専門であるワーグナーの楽劇研究のかたわら、モーツァルトの歌劇《後宮からの逃走》におけるトルコの太守セリムの人物像と結末の彼の台詞についての問題意識を深めていた。一方、**市川**は長年来の研究テーマであるカフカ、リルケに加え、ホフマンスタールにまで対象を広げ、彼の散文作品に関する優れた論文を数篇仕上げたばかりであった。また、新たに同じ職場に加わった**安徳**は博士論文以来の研究対象であるホフマンスタールについて、彼のオリエントに舞台をとった諸作品『影のない女』『エジプトのヘレナ』にまで視野を広げ、いくつかの論文を準備していた。三人が互いの研究対象・関心について意見を交わすうちに、共通する問題意識として自ずとドイツ語圏の最東方ウィーン、プラハから見たオリエントというテーマが浮上、ハプスブルク帝国における東方への眼差しという表題にまとめられるべき共同研究を志すこととなった。

もちろんヨーロッパ中心の文明観、オリエンタリズム、コロニアリズムというテーマはサイドの有名な著書をはじめ、すでに語り尽くされた感もあるが、今回の科研では東西文明の接点であった多民族国家ハプスブルク帝国の地政学的特色に改めて着目し、オーストリア(ことに帝国の首都ウィーン)を共通の起点に、もう一度「オリエンタリズム」というテーマに多角的に迫ろうと考えたのである。

2. 研究の目的

宗教(カトリック)および言語(ドイツ語)によって、西ヨーロッパ諸国と様々なかたちで結びついてきたハプスブルク帝国は一方で、西欧文明の前哨基地としてイスラムおよび東欧文化圏と踵を接しつつ、その影響に強く晒されていた。その地理的位置取りから東西文明の双方に向けられたオーストリアの

「ヤヌスの相貌」とでもいうべき特殊性は当然、文学や芸術諸分野にも反映し、東方文化の影響は独特のエキゾチズム、オリエンタリズムとして大きな実りをもたらした。山崎、市川、安徳による当研究はそれぞれの関心領域から、これまでの研究であまり顧みられてこなかったテーマを特殊化して深く掘り下げることによって、ゲーテの時代に始まり、ロマン主義において隆盛を極める他のドイツ語圏の文学・文化におけるエキゾチズムとの差異を明らかにしつつ、ハプスブルク文学・芸術における東方文化との交流および受容の一つの側面に光を当てようとするものである。具体的に、三人が個々に選んだテーマは以下のとおり。

山崎は《後宮》結末の書き換え(スペインの若者とトルコの太守が親子であったという原典の設定を、仇敵同士というものに変えた)と、そこで言及されるオランという地名に注目、同時代のヨーロッパとイスラム圏の関係など、これまでのモーツァルト研究に欠落していた視点を加えて考察する。

市川はホフマンスタールと東洋思想、リルケとロシア、カフカとヘブライ、ロシア等の東方的思想・文学という三つのテーマを立て、個々の作家におけるオリエントへの眼差しと「他者性」の問題を探求する。

安徳はホフマンスタールの東洋的素材を扱った作品から、同作家の言語観にアジア的なものが与えた影響を抽出し、分析・考察する。

3. 研究の方法

山崎は1.《後宮》結末部の解釈をめぐる先行研究の収集と読解、2.トルコ・オリエントを題材とする他の(同時代およびモーツァルト以前の時代の)オペラ・劇作品の筋立てに関する比較研究、3.18世紀におけるヨーロッパとトルコ、イスラム圏との政治・国交史、4.《後宮》結末で言及されるアルジェリアの港湾都市オランをめぐる地誌的調査など、多角的な方向から本テーマにアプロ

ーチ。その結果、とりわけ4のオランをめぐる、1708年のイスラムによるオラン奪還、および1732年のスペイン軍によるオラン再奪還をめぐる古文書・新聞類を精査・解読、併せてオランを含むアルジェリアの地理・歴史が（モーツァルト、台本作者シュテファニーが読むことの出来た）同時代以前の史書、百科事典等にどのように記述されているかを調査した。

市川は以下の三つのテーマについて、それぞれの対象にふさわしいアプローチを考えた。

ホフマンスタールと東洋思想 東方＝東洋へのまなざしが、ホフマンスタールの世界観にどのような作用を及ぼしているのか、彼のエッセー『ヨーロッパの理念』を体系的に分析する。なお、本テーマ・対象については**安徳**の研究とも重なるので、意見交換・資料の共有など、密に連絡をとりつつ、進めた。

リルケとロシア 若きリルケの二回のロシア旅行を軸とした、ロシア人、ロシア文化との接触・交流を、特に当時のロシア関連のリルケの手紙を詳細に分析する方法により、リルケの東方＝ロシアへのまなざしの質的深化を具体的に検証する。同時にリルケ作品におけるロシアの形象イメージの反映を検証するために、ロシア現地での風土論的調査を行なう。

カフカとヘブライ、ロシア等の東方的思想・文学 小説『審判』の形象イメージを構造的に分析することで、カフカ文学における東方的形象イメージの独自の活用法を具体的に抽出する。

安徳は、ホフマンスタールの言語観にアジア的なものが与えた影響を探るため、東洋的素材を扱った作品を対象に、個々の“作品論”を目指すという方法をとった。何らかの思想を取り出すために作品を分析するのではなく、作品を形作る原動力のひとつとして、東方への関心がいかなる役割を果たしている

かを明らかにするためである。考察の土台として、一年目にウィーンでフィールドワークと資料収集を行った。

なお、本テーマについては**市川**の研究テーマ（上記参照）との関わりをも考え、異なる作品、しかも一方が他方を補完するような作品を分析対象に選んだ。その結果、『オイディプスとスフィンクス』を選定（『帰国者の手紙』『ギリシアの瞬間』『影のない女』などとの連関を視野におきながら）、詳細な分析を行なった。また、本科研全体の目的である“18世紀以来のエキゾチズムとの比較”を考察の方法としても取り込み、ノヴァーリス、ヘルダーとの比較対照によって、ホフマンスタールの創作における「東方」の意味をさらに考察した。一年目に収集した18世紀関連の資料をもとに、主に比較対象としたのは、ノヴァーリスの『サイスの弟子たち』、ヘルダーの『言語起源論』『彫塑』『歴史哲学異説』である。これらについても、思想史的視点より作品論という姿勢に重心をおいて考察した。

4. 研究成果

山崎は1. プライスピッシュの博士論文（1908）をはじめとする先行研究をも活用しながら、オリエントを題材とする劇やオペラの台本を精査、その大多数がヨーロッパの恋人や夫婦の一方が海賊により、イスラム世界に拉致されて、離れ離れとなる、再会を遂げたあと、君主の許し等を得て、再び結ばれる、という筋立てによって《後宮》と共通しながら、「オラン」という地名が《後宮》においてのみ言及される点を確認することで、モーツァルトの歌劇と他の劇作品の共通点と違い、そのユニークな位置づけを炙りだした。

2. 古文獻 Wiener Zeitung（ウィーン新聞、週2回発行）の収集と解読により、とりわけ1732年6～7月の（ハプスブルク帝国）スペイン軍によるオラン派兵と戦闘による

同地の奪還事件が、最初の段階から事態の収束と安定に至るまで、実に数ヶ月間、報道記事の一面を飾り続けたことをつきとめ、さらには同年発行の The Historical Register 紙の諸関連記事をも併せ読むことで、この事件がヨーロッパ中の大きな注目を集めていた事実を確認するに至った。

3. 上記2の記事解読により、オランの攻防と奪還が全ヨーロッパの関心事であった理由が判明。地中海を荒らしまわり、沿岸の住民や航海者にとって恐怖の的であったバルバリア海賊の一大拠点がおランを中心とするアルジェリアにあった事実に着目し、Gillian Weiss の論文(2005)ほか、バルバリア海賊に関する歴史学的文献を読破。その結果、当時の奴隷問題が(奴隷=アメリカ大陸に強制連行されたアフリカの黒人という現代のイメージとは全く違い)、海賊によるヨーロッパ人の捕獲、イスラム圏への奴隷としての売却を一番大きな対象とするものであり、最盛期にはイスラム圏全体で数万人のヨーロッパ人奴隷が存在したことを確認。

以上の事実から、《後宮》の筋立てが現実離れした荒唐無稽なメルヘンであるという現在の解釈とは全く違い、当時の現実世界の歴史的状況に密接につながったアクチュアリティーを持つものであるという認識にのっとり、太守セリムの前半生をはじめとする《後宮》の背景と筋立てを再構成、以上の研究成果を古文書の翻訳等を含む詳細な資料にまとめ、それを付して FLC 研究発表会での研究発表を行なった。なおオラン攻防からちょうど五十周年にあたる《後宮》初演の年、この事件に関する記憶がどの程度残っていたのか、モーツァルトをはじめとするウィーンの人々にオランという地名がどう認識されていたのかに関しては、決定的な資料が見つからず、確証が得られていないが、これについては当科研で購入・資料収集した当時のウィーン人、ヨーロッパ人の書簡・日記を

読みつつ、追跡調査中である。現在、以上すべての視点と成果を網羅した著書を執筆、同時に来年の刊行を視野に出版社を探して交渉中である。

市川は上記三種類のテーマについて、それぞれ次のような結果を出した。

ホフマンスタールと東洋思想 『ヨーロッパの理念』にある「アジアへのまなざし」により、ホフマンスタールが、東洋という「外側に立」ち、「限界を超える」行動を示したラフカディオ・ハーン等を例にとり、異質な外部からのまなざしを理解することによって世紀末以来続くヨーロッパの精神危機を克服する可能性を模索しようとした。つまりアジアという外部=他者性を深く認識し、そのまなざしをも柔軟に取り込む形での、開かれた対話的なコスモポリタンの全体性の中に、ヨーロッパの再生を構想したことが予測できた。このテーマについて、近々論文として公表する予定である。

リルケとロシア リルケにとり、二回のロシア旅行が、忘れえぬ聖なる宗教的体験の巡礼の旅となり、西洋とは異質のロシアの人間、宗教、風土、事物、芸術から深い感銘を受け、そのインパクトが晩年まで持続し、創作全般に影響を及ぼし続ける原動力になっていたこと、その形象イメージが、特に「芸術としての神」=イコンという形を取り、『時禱詩集』に強く反映されていることを資料・文献の渉猟と解読によって確認。さらにリルケの他の作品にも強い影響を与え続けたロシアの形象イメージを具体的に把握・検証するために、リルケの訪問したモスクワとサンクト・ペテルブルクを訪ねて、風景論的考察を行い、幾つかの研究に繋がる示唆を得ることができた。この成果の概要は2013年の学内の FLC 研究発表会で報告済み、その成果を近々論文として公表する予定である。

カフカとヘブライ、ロシア等の東方的思想・文学 カフカの小説『審判』における

交流問題という視点から、ドア、錠の門、窓、階段、橋、無限分節される空間といった境界形象を詳細に分析し、その際ヘブライ・ユダヤ教のカバラ、さらにはロシア文学といった「東方」のテクストにおける境界イメージと比較・検討した。それらの分析から、カフカがそれぞれの伝統的な東方的境界イメージを絶妙に脱構築して、『審判』の作品内世界の随所に仕掛けとして活用し、その結果、極めて現代的な、相対性理論的かつ、生体論的世界モデルを構築していることが確認できた。この成果は、下記の2013年と2015年に発表した論文で公表された。

安徳はホフマンスタールの悲劇『オイディプスとスフィンクス』について、口頭の研究発表(2012年5月)および論文を刊行(2013年3月)。ギリシア古代以来の歴史をもつスフィンクスという形象が、ソフォクレスの悲劇をはじめとする伝承とはまったく異なる描き方をされている点に着目し、その克明な描写がもつ意味を考察した。他方で、オイディプスがホフマンスタールにおいてたびたび主人公の造形の源となり、西洋における古典的形象ともいえるハムレット、セヒスムンド(カルデロン)と重ね合せられた形で登場することに着目。分析不可能な、ただひたすらその姿と動きを描写するしかない存在を前に、驚愕する人物があり、その出会いの体験を人物が言語化しようとするれば、存在論的問いの袋小路をくぐり抜け、自分の存在をも言葉で打ち立ててみなければならぬ。スフィンクスとオイディプスという二つの形象の対峙を、こうした照り返しの構図として捉えることで、古い東洋的素材たる形象(スフィンクス)が人物の言葉を引き出すさまを明らかにした。

続いて、他の作家との比較によって上記の成果を豊かに裏付けてゆくべく、時代を遡り、ホフマンスタールの創作に様々な発想の種を与えたノヴァーリスの作品に考察を進め

た。その成果は、ノヴァーリスの『サイスの弟子たち』『ハインリヒ・フォン・オプターディンゲン』についての作品論として発表(2014年3月刊行の論文)。二作品のいずれにも挿話として入れられたアトランティス伝説が、作品全体のなかで果たす役割に焦点をあて、この土地が人間と他の生物との会話が可能だった場所・時代として想定されていること、なおかつその土地は消滅したというよりも「我々の視界から消えた」という微妙な表現がなされていることに着目、「自然界全体に共通の言語がある状態を、伝説上の東方に仮託しつつも、人間の生の営み全体を詩作と捉えることで、伝説上の状態がいつでも現実となりうるとされている」と考え、「言語的世界の理想を、時間的・空間的な視界の彼方にありつつ、人間の営みをとおしてつねに現前しうる可能態として捉えるとき、その可能性を何より実体的に表現しうるのが、ここでの東方のイメージである」と結論づけた。

上記の成果からさらに、「ドイツ語圏における東方への関心はそれ自体が哲学的・神学的思考の運動としての広がりをもつ」と見当付け、その広がりを測るべくヘルダーに遡った。ヘルダーにおいては、聖書も東洋の言語ならではの思考表現として世界史のなかに位置づけられており、そのような視野のもとで生み出される言語論・知覚論・歴史論は、ホフマンスタールが直面している主客の分離といった問題からは明らかに自由な、別の視界を展開している。その輪郭を探り、ホフマンスタールのアジア観・言語観との比較を今後さらに深めるため、現在考察を進めている段階である。ノヴァーリス、ヘルダーとの比較を通して、現段階でより鮮明になったホフマンスタールの世界像については、小論として発表した(2014年5月)。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計5件)

市川 伸二 浮遊する交流(中) - カフカの『審判』について 『言語文化論叢 第20巻』、東工大外国語研究教育センター、1~31頁、2015年3月25日。査読無し

安徳 万貴子 闇のなかで 人間 である ホフマンスタールの世界像 (新国立劇場《アラベッタ》公演プログラム、32-34頁) 2014年5月 査読無し

安徳 万貴子 終わりのない流体のなかの結晶 ノヴァーリス『サイスの弟子たち』 (『言語文化論叢』第19号、75-86頁、外国語研究教育センター) 2014年3月 査読無し

市川 伸二 浮遊する交流(上) - カフカの『審判』について 『言語文化論叢 第18巻』、東工大外国語研究教育センター、1~29頁、2013年3月30日。査読無し

安徳 万貴子 ホーフマンスタール『オイディプスとスフィンクス』における名指し (『POLYPHONIA』第5号、1-18頁、外国語研究教育センター) 2013年3月、査読有

〔学会発表〕(計2件)

山崎 太郎 メルヘンと史実の交わる地点 モーツァルトの歌劇《後宮からの逃走》とアルジェリアの港湾都市オラン攻防(FLC 言語文化研究会、東京工業大学、東京都港区大岡山 2015年2月19日)

安徳万貴子 ホーフマンスタールの「悲劇」 『オイディプスとスフィンクス』 (日本オーストリア文学会春季講演会、上智大学、東京都千代田区紀尾井町、2012年5月20日)

東京工業大学・外国語研究教育センター・教授

研究者番号：40239942

(2)研究分担者

市川 伸二(ICHIKAWA Shinji)
東京工業大学・外国語研究教育センター・教授

研究者番号：20176283

(3)研究分担者

安徳 万貴子 (ANTOKU Makiko)
東京工業大学・外国語研究教育センター・准教授

研究者番号：70585132

6. 研究組織

(1)研究代表者

山崎 太郎(YAMAZAKI Taro)